



学校名:新宿区立牛込仲之小学校

氏名:蕎麦田 佳子

[担当教科:小学校全科]

- 実践教科等:学級活動
- 時間数 :全5時間
- 対象生徒 :小学校1年生
- 対象人数 :27人

1 単元名

せかいのなかまと つながろう ～うしなかちゃん モンゴルへ行くの巻～

2 単元の目標

- ・モンゴルの文化に触れ、世界の国々に興味・関心をもつと同時に、他国の文化を尊重する態度を養う。(すすんで参加する態度)
- ・モンゴルと日本のかかわりを知り、自分たちができることを考えることができる。
(つながりを尊重する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルの文化を知ること、世界には様々な価値観があることに気づく。(多様性)
- ・日本とモンゴルのつながりを知る。(連携性)
- ・世界の国々の現状や日本の支援を知り、自分たちが今できること、将来できることを考える。(責任性)

4 単元の指導について

(1)教材観

現任教では、外国語活動を通して積極的に外国語を聞いたり、話したりする意欲を高めたり、日本と外国の生活・文化・習慣・行事等に違いを知り、体験的に理解を深めることを指導の重点としている。また国際交流の時間に、留学生の活用を図り、日本文化を見つめ直しコミュニケーション能力や異文化への関心を高める活動を行っている。

そこで異文化への関心を高めることはもちろん、本単元を通して児童には、自分たちが今いる環境がいかに恵まれているかを感じとらせたい。またモンゴルを含め、世界の人々がよりよい環境で生活をするために自分たちが今できることは何かを考えさせることを通して、自分がよりよく生きるためにどうしたらいいのかを考えるきっかけとしていきたい。

(2)児童生徒観

現任教は、外国での生活を経験している児童や韓国や中国などから来ている児童が多い。本学級の児童も、幼い頃から様々な国籍の友達と過ごしている児童が多いため、外国人に対して偏見をもたず受け入れることができる。外国語活動の時間にスリランカ出身のALTの先生からスリランカに

ついて話をしてもらった時には、興味深そうに聞いている姿が見られた。また英語を習っている児童も多く、日常的に英語に触れる機会が多く、進んで英語でコミュニケーションをとろうとする児童が多い。

モンゴルについては、国名を知らない児童がほとんどであったが、国旗図鑑を読んで国旗を知っている児童も数名いた。「スーホと白い馬」については、図書の時間を活用して読み聞かせを行い、興味をもたせるようにした。

(3) 指導観

単なる文化紹介や異文化体験にならないようにするために、児童に課題意識をもたせるような指導計画にした。自分たちの疑問から次時の課題を設定していくことで、最後は自分の生き方や考え方につながるようにしていく。

第1時では「モンゴルについて知る」というねらいのもと授業を行った。モンゴル語や音楽、食べ物、民族衣装などに触れた。授業後の感想では「もっとモンゴル語を知りたい」「馬頭琴を弾いてみたい。」などの授業に関連した感想をもった児童がたくさんいた。他にも「モンゴルの子供たちがどんな遊びをしているか知りたい。」「モンゴルの小学校の様子を知りたい。」「ウランバートル以外の町はどんな様子か知りたい。」など、今後につながるような感想をもつ児童もいた。

児童には、モンゴルに対して親しみをもつだけでなく、日本とモンゴルのつながりを知り、さらに世界各国と日本がどのようにつながっているかを考えさせていきたい。また、世界の様子を知った上で、自分たちが今できることを考えていけるようにしていきたい。

5 評価基準

観点	他国の生活や文化に対する関心・意欲・態度	他国の生活や文化に対する気付き	自分自身の生き方に対する思考・判断
評価規準	外国には様々な生活や文化があることを知り、そのよさについて興味・関心を持ち、さらにもっと知りたいという思いをもつことができる。 (1-1)	日本とモンゴルを比べ、日本とは違う生活や文化があることに気付くことができる。 (2-1)	世界の現状を知り、自分自身が現在、未来において、どのように外国とかわっていくか、そのために今できることは何かを考えることができる。 (3-1)
評価方法	①発言 ②ワークシートへの記入	①発言 ②ワークシートへの記入	①発言 ②ワークシートへの記入

6 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんな国？	・モンゴルの基本的なことを知り、モンゴルに興味をもつ。 ・モンゴルの文化について触れる。	・モンゴルの基本的な情報を知る。(場所、国旗、言語など) ・モンゴルの文化(あいさつ、文化、食事等)を知る。
2	モンゴルと日本の小学校を比べよう。	・日本とモンゴルの小学生の同じ所や違うところなどを比べ、モンゴルをより身近に感じる。	・ウランバートルの小学校の様子を日と比較しながらクイズ形式で知る。 ・同じところ、違うところをまとめる。
3	モンゴルと日本のつながりを知ろう。(1)	・地方に住む子供たちの教育現状を知り、自分たちが恵まれた環境で教育を受けていることを感じさせる。 ・JICAの取り組みを知り、日本とモンゴルの関係を知る。	・地方とウランバートルの写真を比べ、フォトランゲージをする。地方に住む人々の様子を知り、遊牧民に子供たちがどのように教育を受けているのかを考える。 ・遊牧民の子供たちがウランバートルの学校に行くと、どうなるかを考える。 ・日本のモンゴルへ支援していることを知る。
4	モンゴルと日本のつながりを知ろう。(2)	・日本が小学校以外でも支援していることを知る。 ・モンゴルで活躍する日本人を知り、資金だけでなく技術でも協力していることを知る。	・モンゴルで活躍している日本人がいることを知る。(インタビュー動画) ・協力隊員の話聞き、支援するというのはどういうことかを考える。 ・なぜ日本がモンゴルに支援しているか考える。
5	他の国ともつながろう。	・日本と他の発展途上国のつながりを知る。 ・自分が将来、どんな分野で世界の国とつながっていけるかを考える。 ・自分たちの「今」と「未来」で世界とどうつながっていくかを考える。	・日本はどの国とどんなにかわりがあるかを知る。 ・世界の国々現状を知る。 ・「もし自分が青年海外協力隊員だったら」どんな分野で活動できるかを考える。 ・未来のために、今、自分たちのできることを考え、発表する。

7 授業事例の紹介

小単元名【他の国ともつながろう】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月7日(月)第5限

(イ)実施会場 1年2組教室

(ウ)本時の目標

- ・モンゴル以外の途上国の現状と、日本の海外協力青年隊の活躍を知ること、今後の自分の生き方を考えることができる。

(エ)指導のポイント

- ・自分の生き方を考えることに十分時間をとった。世界の現状や日本の支援の様子などを押さえた上で、自分が将来どんなふうに生きていきたいか、そのためには今何をしなければいけないかを考えさせる。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価規準・評価方法
導入 5分	前時までの復習をする。	・モンゴルと日本との関係、青年海外協力隊の取組をおさえる。	一斉	・モンゴルと日本との関係や青年海外協力隊の取組などを具体的にあげて、今までの学習を想起させる。	
展開 ① 15分	青年海外協力隊が他にどんな国に派遣され、どんな活動をしているかを紹介する。	・発展途上国の現状を知り、日本の青年海外協力隊員がモンゴルだけではなく、世界のいろいろな国で派遣され、様々な分野で活躍していることを知る。	一斉	・モンゴルだけでなく、世界には支援を必要としている国がたくさんあること、日本からたくさんの青年海外協力隊員が様々な分野で活躍していることを、具体的に例示する。	
展開 ② 15分	もしも自分が海外青年協力隊員になったら				自分が将来どのようなことができるかを考えることができる。 (3-1)
	もしも、自分が将来、青年海外協力隊員になったら、どんなことができるかを想像する。	・もしも、青年海外協力隊員になったら、自分はどんなことができそうか考える。 ・個別にワークシートに記入後、グループ、全体と順に発表しあう。	個別 グループ 一斉	・「もしも自分が海外青年協力隊員になったら」と考えることで、世界に目を向けさせるきっかけをつくる。	
展開 ③ 5分	日本と発展途上国は、互いに助け合っている関係にあることを知る。	・日本は発展途上国から資源を輸入していることを知る。 ・発展途上国との関係がなくなったら、自分たちの生活がどのように変化するか予想する。	一斉	・互いに助け合っていることに気付かせる。 ・途上国から資源が輸入されなくなったら、自分たちの生活が不便になることがあることを知り、世界の国々と仲良くしていこうという思いをもたせるようにする。	世界の現状を知ることができる。 (3-1)
まとめ 5分	学習シートに振り返りを書かせる。	・学習を振り返っての感想を書く。	個別		

(2)授業の振り返り

「もしも、自分が青年海外協力隊員だったら、どんなことで世界の困っている人たちを助けられることができそうか」と発問したことで、児童が将来について考えるきっかけができた。そこから、将来のために「今、どうすればいいのか」ということを考えさせた。まずは、自分が日々を大切にしっかり生きていくことが、将来何らかの形で国際協力につながると考えたからである。

そこで前時に児童の感想にあった「青年海外協力隊は他にどんな国へ行っているのか。」「他にどんな仕事をして、困っている国を助けているのか。」などの疑問を本時につなげた。青年海外協力隊の仕事分野や職種を1年生にも分かるように説明することが大変難しく、そこで時間がかかってしまった。説明をしても、1年生にはピンとこない内容もあった。スポーツ分野では、児童がイメージをもちやすく、反応が大きかった。説明時間を短くするために、もう少し紹介する職種を精選すればよかったと思った。

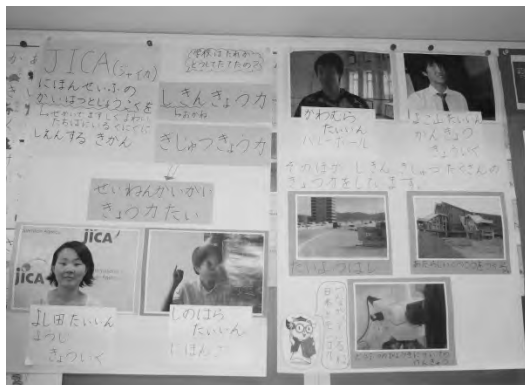
児童が、「青年海外協力隊になる」ということに対して、何の疑問も抱かず、一生懸命自分は何が得意か、将来何になりたいかなどを考えていたことが印象的だった。自分たちも、世界の困っている国を助けるのが当然だという気持ちをもったようだった。その気持ちを持続させられるような指導を計画的に行っていくことが大切であると感じた。

①スライド(一部抜粋)

青年海外協力隊の主な派遣先



②前時まで流れを揭示(一部抜粋)



(4) 參考資料等

- ・JICAプロフィール

http://www.jica.go.jp/publication/pamph/ku57pq00000najg5-att/jica_profile.pdf

- ## ・JICAの仕事

http://www.jica.go.jp/publication/pamph/ku57pq00000naig5-att/work_151224.pdf

8 単元を通じた児童の反応/変化

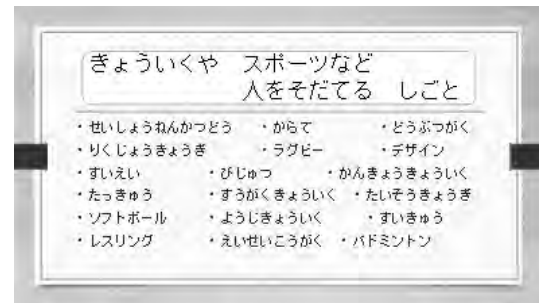
第1時、第2時を終えての感想

- ・モンゴルのことがもっと知りたい。
- ・モンゴルと日本は似ていて面白い。
- ・モンゴルの子供たちはどんなことをして遊んでいるのかを知りたい。
- ・モンゴル小学生はどんな勉強をしているか知りたい。
- ・モンゴルの学校に日本の国旗があるのが不思議。
- ・学校に通う人の人数が多くてびっくりしました。
- ・ウランバートル以外の町の様子も知りたい。

第3時を終えての感想

- ・モンゴルの人たちは、日本人が好きなんだな。
- ・モンゴルの人たちを日本人が助けたと思うと、すごいなと思いました。
- ・学校の中になぜ日本の国旗があるのか、意味がわかったのでうれしかった。

青年海外協力隊の協力分野



③ワークシート

せかいの くにと つながろう
 ～うしなちゃん モンゴルに いく のまき～

N05 なまえ _____

①もしも せいかんかいがい きょうりょくたいいんに な
 ったら・・・

じぶんは、どんなことで かいほうとじょうこうの ひとた
 ちを たすけて あげられるかな。

まかんどう

- ・日本に人がどうやって助けているのか、もっと知りたい。
- ・他にどんな日本人がモンゴルにいるのかな。
- ・他のことで助けていることがあるかを知りたい。

第4時を終えての感想

- ・スポーツで助けるなんてびっくりした。
- ・ジャイカがいろいろな国を助けているんだなと思いました。
- ・日本はたくさんモンゴルを助けているんだな。
- ・なんで日本は、モンゴルを助けているんだな。
- ・青年海外協力隊は、他にどんなことで助けているのかな。
- ・他にどんな国に行っているのかな。

第5時を終えての児童の感想

- ・青年海外協力隊の人たちってすごいな。
- ・いろんな仕事があるんだな。
- ・ぼくも、将来海外青年協力隊になりたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

授業全体の成果

国際理解教育では、文化を理解したり、外国の人とのコミュニケーションをとったりすることに重点を置いてきたが、海外派遣を通して一時的な文化理解や支援ではなく、長期的にかかわっていくことやその国に合った支援をしていくことの大切さを学んだ。そこで児童には、単発的な「国際理解」にならないために、「自分の生き方」を通して、開発途上国とかかわっていくための素地を養いたいと思った。そこで、文化紹介や体験中心の指導計画から、児童が自分の生き方を考えていけるような指導計画に変更した。

しかし1年生の児童に、世界の国々と自分とのつながりを考えさせるということは、大変難しいと感じたため、「もし自分が青年海外協力隊員だったら」と「もし」という仮定法未来を考えることで、将来の自分と世界の国々とのつながりについて考えさせることにした。第3時、第4時の学習内容の効果もあり、児童が青年海外協力隊員になるという未来に疑問を抱かず、自分が世界のために何ができるか、将来何になって困っている国を助けたいかを考えることができた。

課題及び課題の改善策

P<計画>: 児童が課題意識をもち、児童の疑問から次の課題を設定できるような指導計画にした。

D<実施>: 児童に課題意識をもたせるため、疑問をもつような写真を活用した。また興味関心をもつことができるよう、クイズを取り入れたり、動画を活用したり、ワークシートを工夫したりと、1時間集中して学習できるようにした。

C<検証>: 児童の発達段階を考えると、内容としては難しかったのではないかと考える。特に言葉の説明が、1年生にわかる言葉に直すことができない面もあった。またそのことで教師の説明が長くなり、児童同士の交流等の時間が短くなった場面もあった。もう少し、児童同士が互いの考えを交流できる時間を確保する。

A<改善>: 各教科、領域などの指導計画を見直し、児童が折に触れ今回学んだことを思い出すような機会をつくる。そして、改めて自己の生き方について考えていけるようにする。

10 教師海外研修に参加して

国際理解教育をなんとなく行っていたが、今回研修に参加して、「国際理解教育について自分はこう考える」という明確な思いをもつことができた。そのことで児童に何を伝えたいか、何を考えさせたいかという、ねらいのはっきりした授業を行うことができたと思う。教師自身が、確固たる自分の思いをもってつくりあげた授業は、必ず児童の心に響くと思う。研修に参加したことで、その確固たる思いをもつことができたことが、私にとって一番の成果である。今後も、児童が世界の国々とつながっていくために、今自分は何をすべきかをしっかりと考えていけるような機会を設けていきたい。